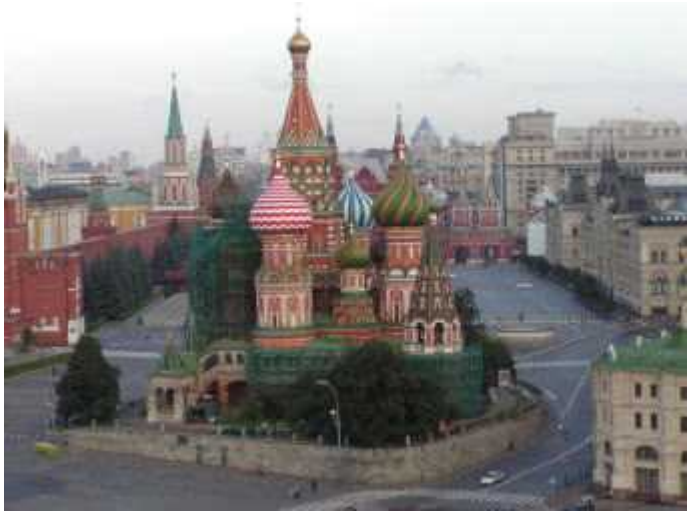
山本正志のロシア旅行記　part2

モスクワと周辺のゴールデン・リング

２００３年　８月２０～２８日



クレムリン前の赤の広場　聖ワシリー聖堂
右はグム百貨店　　ロシアホテルの屋上から

８月２０日

出発。朝９時過ぎ迎えの関西空港直行のシャトルタクシーに乗車。車内には寺本さん、有吉さん、田中さんが乗車。松岡さんと木又さんを加えて６人になり、名神高速に入って１１時過ぎに空港着。　すでにカウンター受付ではユーラスツアーズの添乗員、金森さんがいて久方ぶりの再会。

今回の旅行は昨年の参加者のうち長砂先生ご夫妻や上島先生、木全さんと駒井さん、田中さん、有吉さんをはじめ９人もが二度目、あらたに渡辺さんのご主人（京大時代の後輩で文学部、神戸の盲学校の教員）と娘さんの栗子さん、年金者組合の寺本さんと木又さん中村さん、松岡さん、神谷さん、畠山さん、服部さん、藤原先生、中野一新先生夫妻、芦田文夫先生夫妻、杉本昭七先生など新顔を加えて総勢２８人。　全員そろって大韓航空機に搭乗、１時４０分過ぎに離陸、３時前にソウル空港着。韓国がこんなに近くの国だったことをあらためて知らされた。ジャンボに乗り換えていよいよモスクワへ出発。機内は満席でわが集団は最後尾。約８時間少し。　ロシア上空は行けども行けどもはげ山なのかタイガなのか、なーんにも見えず。やっとウラル山脈をこえたあたりから眼下に町並みや道路が。夕陽を追いかけて西へと向かうのでいつまでも明るい。

そしてモスクワ・シェレメチェボ空港着陸の直前に金森さんが男性パーサーに何やら話を。そのパーサーが私の席にやってきて「機内搭乗員全員のお祝いの署名です」といって大韓航空のポストカードに機長はじめ全員がアルファベットの添え書きをした連名のバースデイカードを進呈された。８月２０日は５７才の誕生日、昨年もタシケント行きのウズベキスタン航空の機長から自分の似顔絵入りのバースデイカードをいただいたが、金森さんらしい御配慮に感謝。

さて、バスでホテルへ到着、「今夜の食事はついています」という説明だったが、現地ガイドのドミトリー．トカチェンコさん（モスクワ大学文学部５年生、２０才）の案内で予約のレストランへ行ってみると「うちはもう閉店」ということで「いったいどうなっているんだ」「もう食事はいらないからすぐに部屋で休みたい」（日本時間では午前４時になっているから眠いのは当然）。すったもんだのあげく、予約は２１階（最上階）のレストランだったとわかり一同ぶつぶつぼやきながら暗い室内でロシアで初めての食事。やっと念願のビールにもありつき、これで安心して

眠ることができる。

今回の旅行には昨年の経験からいろいろと秘密兵器を準備、小さなパソコン（ビクターのインターリンク）は記録用でもあり、デジカメ写真の現地編集用にと記録用 PC カードも３枚準備。新しい１０倍ズームのオリンパスのデジカメと娘の新型８ミリビデオ（これは軽い！）そして PDA（東芝の GENIO、ポケットパソコンで録音もできる）。お醤油と蚊取り線香も。それから出発前日に思案のすえ買った携帯 CD カセットデッキとショパン全曲演奏の CD セット１８枚。調べてみるとポーランド政府肝入りで作成されたらしいこの CD セットの演奏者のなかにシュピルマンが。日本で公開された「戦場のピアニスト」の主人公。今回の旅行はモスクワ近郊のゴールデンリング歴訪であり、夜はあまり街中に出かけることもないだろうし、一人でゆっくりホテルで CD コンサートとするか。

８月２１日

今日は朝から小雨、残念。朝一番に気にかかっていたのでフロントで「インターネットは使えないか？」とたずねたら「フロントの２階にビジネスセンターがある、９時から」と教えられたので９時前にいくと、パソコンが２台だけ、２～３人が順番を待っているという、９時出発なので諦めるしかない。高校野球、倉敷工業は？平安高校は？

まずはクレムリンの赤の広場から、ここは昨年きたので、向かいのグム百貨店へ。店内は長い通路が３本でその両側にフランス･イタリアなどのブランド品の店としゃれた洋装品店などが３階まで。２階、３階も通路に歩道橋が数本かかっており、「ソ連時代には高級幹部だけの商品豊かな最高級の百貨店」といわれてきたが、市民や観光客もゆったりできる日本でいえば大型スーパーのようなフリースペースがあちこちに。３階でエスプレッソコーヒー２６ルーブル（約１００円）は市民にとっては少し高いのかな？映画館も入っており上映作品は日本と同じ、「パイレーツ・オブ・カリビアン」

その後はバスで市内観光。昼食はトレチャコフ美術館入り口のレストラン。ここで長砂先生から挨拶、「昨日は山本さんの誕生日でした。乾杯」シャンペンは金森さんからのお祝い。大韓航空機長などスタッフからのバースデイカードを紹介。ビールがうまい。

トレチャコフ美術館に入館。（写真）数年前に京都市美術館でトレチャコフ美術館展があったので知ってはいたつもり。ロシアの誇る世界有数の美術館だけあって、駆け足でまわり、果たしてどのくらいの作品を観ることができたのか。近代・現代のロシア出身の画家、シャガール、カンディンスキー、ロシアで最も尊敬されているイリヤー・レーピンやその他ロシアの作家の作品を多数所蔵している。駆け足でまわり、果たしてどのくらいの作品を観ることができたのか。ロシアの作家の作品をしっかり所蔵している、という実感。日本語の解説の作品目録はなかったのが残念。

＜トレチャコフ美術館について＞　現在は七万点に及ぶロシア美術の大コレクションをほこる美術館であるが、トレチャコフ兄弟（兄パーヴェル 1832－1898、弟セルゲイ 1832－1892）の原コレクションの寄贈作品は、ロシア美術に限れば約千八百点。兄弟亡きあと、美術館の発展と並行して、中世のイコンやソビエト美術の充実が図られた。生前、トレチャコフは集めた作品が民間のコレクションであることの誇りをもっていたようで、美術館を設計し

たヴァスネツォーフは、彼のことを「芸術の保護者ではなくて、公益を目指すまじめな労働者だ」と繰り返し主張していた。また、美術館開館直後、美術館を見学した皇帝ニコライ２世は、ロシアの歴史を尊重し、民衆と芸術を近づける美術館の試みとコレクションの哲学に感服し、弟セルゲイ・トレチャコフに爵位を与えようとしたが、トレチャコフはそれを丁重に断り、「私は一人の商人として生まれましたので、一人の商人のまま死んでいきたいと存じます」と言ったという。

美術館で時間をとったため、あわてて「これも経験」と全員で地下鉄に２駅分だけ乗車、しかしモスクワ地下鉄で有名な６０mのエスカレーターもなく、きれいに整備された大規模地下シェルターのようなムードもなく、雑踏にもまれてちょっと失望。

夜のサーカスとバレエ鑑賞のため少し早めのディナー。問題はそのあと・・・。

「バレエは私が案内します。サーカスは山本さんです」と金森さん。そこでサーカス部隊の隊長としてバスに案内して、いざ出発。ところがドミトリーさんが「**山本さん、チケットが15枚になっていますが14人しか乗っていません**」という。そこでもう一度レストランまでの道を引き返してさがしたが、？？？「○○さんではないか？」とか声があがるが、参加者の名前など控えていない。「時間がもうありません」といわれて見切り発車、不明となった人は無事自分でホテルまで帰ってくれるだろう、と決断。

モスクワ・サーカスはさすがプロ。洗練されたスターたちの演技は女性のピエロもユーモラスで熊やアシカ、４m以上の大蛇やワニまで出演。９時に終演。その場でドミトリーが「金森さんと話ができました。バレエのバスに１３人が乗ってしまったのでチケットが１枚足りなくなりました。結局金森さんがバレエを諦めざるをえなかったようです」という結末。ホテルの売店でビールを買って無事何事も起きなかったことに乾杯！

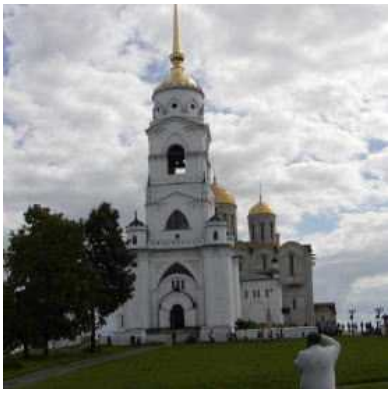
＜モスクワ・サーカスについて＞　日本で「ボリショイ・サーカス」として親しまれているモスクワの国立サーカスは、世界最大のサーカス組織として、約八〇〇〇人ものアーティストとスタッフ、六六〇〇頭を超える動物、一〇〇近くの常設・仮設劇場を持ち、世界各国で公演を行なっている。ただし、ロシアには「ボリショイ・サーカス」の呼称はない。日本の興行師がサーカスを日本に呼んだときに、ボリショイ劇場にちなんでつけたもの。ロシアのサーカスは日本でイメージされる芸人の世界とは大きく異なり、優れた芸人はアーティストとして尊敬され、またアーティストの養成学校も持っています。

８月２２日

今日からモスクワとおわかれして、いよいよゴールデンリングへの歴訪となる。大きな幹線道路を走りつづけてウラジーミルへ。山荘風の小さな小さなレストランで休息。（写真左）コーヒーを頼んだがどうやらインスタント。モスクワのロシアホテルでもコーヒーはまずカップにお湯をいれてパックのネスカフェ。どうやらこの国ではコーヒーへのこだわりは薄いようだ。さらに走り続けてやっとウラジーミル郊外のレストラン。

入り口での「パンと塩」の歓迎はロシア農村での来客歓迎式の基本だ。

バスのなかではインスタントの「ロシア語講座」。まずはアルファベットから。金森さんがくばった譜面のロシア民謡をみんなで合唱（もちろん即席のロシア語で）。金森さんはうたごえをやっていただけあってさすが。
金森さんの解説では**「ロシア語は詩の言葉。イタリア語は歌の言葉。フランス語は恋の言葉。ドイツ語は軍隊の言葉」**とか。そういえば映画「エルミタージュ幻想」をみたことを思い起こすが解説や会話のやり取りは「詩人プーシキンの国」という印象に思い当たる。ドミトリーさんの「ロシア民謡」はさすが！


ウスペンスキー大聖堂

ウスペンスキー大聖堂に入る。「ウスペンスキー」とは「聖母マリアの永眠」という意味でモスクワのクレムリンをはじめロシア各地に同名の建築物は数限りなくあるという。裏庭からのパノラマは絶景。野原というが原野というか、まさにそのままが絵に。ところがすみっこの方に大きな煙突が（実は火力発電所の冷却塔）。展望台でロシアの中学生たちと遭遇、突如仲良しとなって両脇にワーッと集まってきて記念撮影。
さてそれから... 宿泊のスズダリまでの幹線道路が大渋滞。途中のボゴリューボボ村のポグロフ・ナ・ネルリ教会にやっと到着。「原野のなかの一軒家」といったポツンとたてられた何の変哲もないさびれた小さな教会が実は１２世紀のもので「世界遺産」。「ロシア建築の白鳥」と呼ばれている。スズダリまでの道の両側の景色は草原一色。山が見えない中をさらに走り続けてやっとスズダリに到着。見物は明日にしてリザリットホテルに。二階建てのしゃれたホテルで夕食。外は出歩く目当ても何もなし。

ロシアの中学生たちと

←ポグロフ・ナ・ネルリ教会

８月２３日

ホテル出発。途中でユーリアさんが乗ってきてスズダリ観光。夕べはバスの窓から見渡しながら「なんと教会の多い村なんだろう。まるで教会の展示即売会のような村」との印象をもったが、解説によると「３０の教会と１５の鐘楼と５つの修道院」があるとのこと。ユネスコ・世界遺産に登録されている。スパソ・エヴフィミエフスキー修道院（男性）では５人の修道僧によるア・カペラのコーラスが聖堂内に荘厳な響き。外に出ると鐘楼の鐘の演奏が。外に出て、川向こうにあるポクロフスキー修道院（女性）を望む。川をへだてて離れているスパソ・エヴフィミエフスキー修道院とポクロフスキー修道院の間には地下道があり、双方から掘り進んだが、女子修道院からは３００m、男子修道院からは３０mしか進まなかったとか。なんと女性の恐ろしい執念！ユーリアさんによると「スズダリはロシア正教のメッカの１つであったこともあり、かつては１５もの修道院があったという。今も面影だけ残す修道院跡があちこちに。中心部のクレムリンへ。１１世紀に構築されたとされる土塁は１４００mに及んだが、その後何回も破壊されている（モスクワ

スパソ・エヴフィミエフスキー修道院

のクレムリンは政治の中心だがクレムリンというのは城塞という意味)。スズダリの町は建築物は２階まで。したがって圧倒的多数の民家は木造。かつてアメリカ人が広い地域を買占めに来たが、規制がきびしくあきらめたという話。木造建築物および農民生活博物館を見学。

昼をすぎ空腹と歩きつかれて「早く食事とビールがほしい」の声。おそい昼食のあと、コストロマへ。バスの中では一同爆睡。７時まえに「これがボルガ河です」という幅１ｋｍ以上の河をこえ、ボルガホテルに到着。夕食後一人で、ホテルで確かめた「インターネットセンター」へ。パソコンが１０台ほどあり無料。さっそく日本のニュースを確認。常総学院が東北をやぶって甲子園優勝となったこと、その他の京都のニュースも。別に大きな変化なし。なぜかメールはアクセス不可。帰りにスーパーによってロシア製のカップラーメンとカレイのてんぷらを買うと長砂先生や渡辺さん、金森さんたちも買物。大きめのカレイのてんぷらは１１ルーブル（約４０円)。

ここで金森さんの「ロシア人気質」のお話。　「明るさについてはかなり感覚がちがいます」。日本人にとってはホテルも街中も「とても暗い」と感じるが、彼らにとってはあまり明るいのは歓迎されない。かなり薄暗いところでも字を読むことができる（日本もかつてはそうだった)。ロシア人が日本に来て「なぜ蛍光灯が家の中で使われているのか？」彼らにとっては蛍光灯は仕事場の照明であり、自宅は電球、それも間接照明が一番。今でもお客様を迎えての最高の歓迎は「ローソクの灯」という。

もう一つ、これはドミトリーさんの話。ロシアの若者は結婚は相当に早く、離婚も早いのだそうだ。１４才になるとパスポート（外国旅行のためではない）を持ち、結婚暦も離婚歴も（住所、学歴、職歴、兵歴：徴兵制で２年間、個人の経歴すべて）記入される。だから女性は離婚してもこどもの養育は心配がない。父親にも養育責任がついてまわり、就職にしても再婚にしてもすべてパスポートから逃れることはできない。パスポートはどうやら「身分証明書」のことらしい。

ナナカマドの話。　モスクワをはなれ、スズダリへ向かう道筋や民家の周りにはナナカマドの木が植えられており、豊かな葉の茂った枝に真っ赤な実もたわわ。以前北海道でみたナナカマドとは違って少し柔らかい赤色で粒も大きい。ロシア人はこれを食用にしているし、お酒も造っているそうだ。スーパーでやっと見つけてみんなで味わってみたが、日本の梅酒に似た味わいで２４度。

８月２４日

ホテルの部屋で目を覚ましたのが６時３０分。窓から日の出の太陽が、さわやかな気分で起床。午前中はコストロマ市内観光。現地ガイドはナターシャさん。まずはボルガ河を一望できる展望台へ。中心に巨大な台座がありその上にはレーニンの像。ナターシャさんによると、造ったときはピョートル大帝の像をのせる計画だったとか。

市内中心部の市場へ。この町は亜麻が特産ということでレースや刺繍の高級な製品が。スヴィヤト・イパティエフスキー修道院へ。コストロマは３００年前からロシア皇帝のロマノフ王朝の本拠地であり、修道院はその象徴。ロマノフ宮殿がある。だからということもあろうが１９１７年のロシア革命以降、王朝関係の建築物や教会などはことごとく破壊されたという。５人の修道僧のア・カペラのすばらしいハーモニーに感激して CD を買う。１０ドル。ホテルへ帰って CD

カセットで聞くことにしよう。

駐車場の露店を見て回っていると、お兄さんが「ヤポンスキー、硬貨を持ってないか？」とよってくる。１０円と１００円の硬貨を見せると「これと交換」といって渡されたのが「スターリングラード解放の記念」硬貨。額面は３ルーブル。「おまけ」でくれた硬貨には宇宙旅行を果たしたガガーリンの顔、１ルーブル。(写真右)

昼食をすませ、レストランでそのまま部屋を借りて「自己紹介」。いろいろな繋がり、人間関係が浮かび上がって「えっ、あなたがあの○○さんでしたか！」というような初対面とは思えない和やかなムード。寺本さんは「中野一新という名前は以前からよく知っていたがあなたがそうでしたか」という具合。洛陽女子（今では洛陽総合高校）を退職するまで私教連の組合員として孤軍奮闘をはたした畠山さんは「退職金などの差別扱いを許さず、これから裁判をおこす」と決意表明。ところが長砂先生が「あの校長の兄弟は家庭教師をしたのでよく知っているよ」とのこと。支援の輪が広がる。（その後 2006 年 1 月、大阪高裁で勝利和解成立）今から「来年の旅行はシベリア」とか「キエフの旅行でオデッサまで足を延ばし、戦艦ポチョムキンのオデッサの階段だけは見たい」とかの希望も。

午後は予定では「自由行動」となっていたが、まとまって「ボルガの船旅」ということになり、小さな観光船を借り切って約１時間の船旅（一人１５００円）。川面からスヴィヤト・イパティエフスキー修道院を眺め、1万トンはあろうかという巨大客船もボルガ下りで橋桁をくぐって進んでいく。河の水は澄み切ってきれい、というわけにはいかず、すこし濁っていた。

その後少し早く５時前にホテル着。買物に出かけるが木又さんから頼まれたインスタントカメラ（レンズ付フィルム）は店にはなかった。ドミトリーさんに聞くと「ロシアにはありません」とのこと。

8 月2 5 日

スパソ・プレオブラジェンスキー修道院の鐘楼

コストロマを出発、ヤロスラブリへ。ボルガ河を８０kmほど遡った地点になるが、これでモスクワにはかなり近づいてきたことになる。そういえば、町を走っている車をみてもこれまでと違って洗車してあるのか、こ綺麗で、トロリーバスなども錆や穴ぼこがない。

モスクワについでにぎやかな町（ＳＴ．ペテルブルグは別として）といわれている。スパソ・プレオブラジェンスキー修道院を見学。鐘楼への狭い狭い階段を昇りきると屋根の上にねぎ坊主のような独特の尖塔がたつ。私立博物館では古時計とオルガン、オルゴールやレコード（いわゆる蓄音器）アイロンや鐘のコレクションが部屋中に。

３時過ぎにホテルに到着。今日はこれからは「自由時間」。ホテルで場所を確かめてドミトリーさんに案内されて「インターネットセンター」へここは有料、しかし日本語フォントがセットアップされていないため、YAHOO の検索画面でも日本のページはロシア語か□□□□、□□ばかりで判読不明。これからは日本人観光客やビジネスマンも来るだろうに、日本語フォントくらいは入れていてほしい。ところでドミトリーさんがとなりのパソコンで「これが私のホームページです」といって見せたのは４人でグループを組んでいる仲間とのクァルテット。彼は作曲もする

という。しかも画像をみると肩までの長い髪。今は短く切っているのだという。モスクワへのバスの中で金森さんが紹介したが、４人の仲間とのCDを出している。しかし彼はCDを２５枚しか持っていなくて、「みなさんには差し上げることができない」という。（配ってしまうと彼の所蔵がなくなってしまうから）そこで私が１枚だけもらって帰国してテープにコピーを作成した上で今回の参加者全員におわたしすることにした。（これ、本人の了解があっても著作権の侵害?）

ホテルに帰って夕食の後、買ってきたナナカマドのお酒をもって金森さんと松岡さんの部屋に集合。１１時すぎまでの語らいとなったが、金森さんが「山本さん、夕食のチキンのメインデッシュは食べてないんでしょう。カレーをつくりましょう」といって、スーツケースの中からお米とコッヘル。さっそくご飯を炊いていただいてレトルトカレー。久しぶりのご飯をいただいた。一同には梅干入りのおにぎりが。有吉さんも山椒いりのちりめんじゃこと味付け昆布のサービス。

８月２６日

スパソ・プレオブラジンスキー聖堂

今日はヤロスラブリからモスクワへの帰還。途中でロストフのクレムリン見学。寺院のなかにはアレクサンドル・ネフスキーの肖像。聖堂の鐘は３２ｔ。年１回祭りの時に打ち鳴らされる。　続いてペレスラブリ・ザレスキーへ。　ここのクレムリンはモスクワのクレムリンより３００年も早くにつくられたもの。スパソ・プレオブラジンスキー聖堂を見学。

セルギエフ・パッサートには着いたものの、ここでも問題が。予約のレストランに入ってみると２時からの昼食の予定が、「３時半と聞いている。予約がいっぱいで時間を早めることは不可能」といわれ、（どうやら現地ツーリストとのやり取りが混線していたのか、「日本人の客は一段落した後にまわしてしまえ」となったのか）外は雨。

２時からトロイツェ･セルギエフ大修道院へいってもガイドは来ていない。さて、どうするか。緊急非難で結局トロイツェ・セルギエフ大修道院の中の狭いカフェで一時休息となった。それから修道院に入場して見学。さすがにロマノフ王朝の本拠地だけあって、寺院の内部は装飾もすばらしいもので、大勢の信者たちは入り口で十字を切り、祭壇のところでイコンにキス、我々は無神論者の集団であり、おそらく「この不心得者の東洋人めが」とキリストも聖霊もあきれていたことだろう。

モスクワに近づくと次第に渋滞、それに雨。やっとロシアホテルに。さっそくホテルのビジネスセンター（といってもパソコンが２台だけ）をたずね、「インターネット？」というと１台のパソコンをあてがわれたが、やはり日本語フォントが入っていないからチンプンカンプン、諦めた。

８月２７日

今日でモスクワともお別れ。今日の予定はプーシキンの家博物館だったが、昨日のモスクワへのバスのなかで「博物館はしばらく休館らしい」ということが判明。現地へ行ってみないとわからない、というのが今でもロシアの常識。いろいろ調べた結果、金森さんから「新しくできた大祖国戦争勝利記念公園はいかがでしょう」ということでそちらに向かう。公園に入ると

小型の軍艦、大きな列車砲、戦闘機、それに戦車、大砲などが延々と。公園の中心には１００mをこえる高いオベリスク、頂点付近には大きな「勝利の女神」。

大祖国戦争勝利記念公園

記念館に入場。中は「大祖国戦争」の展示、天井を覆っているのはガラス玉を連ねた「涙の結晶」。「スターリングラード」と書かれた部屋に入ると大パノラマが。壊れた戦車や大砲の周りでドイツ、ソ連双方の兵士が戦闘をくりひろげ、平地には現物（もちろん模造)、そのままひろい地平までのみわたす限りの絵。中心に描かれているのはどうやら捕虜になったドイツ軍司令官のパウルス将軍。次の部屋は「レニングラード」。ドイツ軍の９００日の包囲の下、軍と市民の結束でもちこたえ、６０万人の犠牲を払いながら最後の勝利を手にした。3つ目の部屋は「ベルリン最後の戦闘」ベルリンになだれこむソ連軍、ベルリン庁舎の頂に赤旗を掲げる兵士。ドミトリーさんの話では「曾祖父も祖父も戦争に行きました。曾祖父は行方がいまだに不明です」という。

勝利記念公園からゴーリキーの家博物館へと向かう。あいにくの雨。そんなに大きな建物ではないが２階部分が展示フロアになっており、「どん底」の舞台メイクの小さな模型などもあり、作家の実績が偲ばれる。ところで、ロシア革命とその後の「社会主義建設」の局面でのゴーリキーと絶対的権力者スターリンとの確執、そして最晩年のゴーリキーの痛ましい生涯と病死の謎を解明する最近の著作に「磔のロシア」という本が２００２年５月に岩波書店から出されている。

ゴーリキーの家博物館

マヤコフスキー、ショスタコーヴィッチ、エイゼンシュテインなどとともにスターリン時代のゴーリキーの芸術家としての生き様が新しくソ連崩壊後の資料をふまえて記述されている。 十月社会主義革命にあたってはボリシェビキ支持の立場であったゴーリキーがやがてレーニンと対立、結核の療養もかねてイタリアに移ったが、１９３３年に帰国。作家同盟の結成に尽力するなどスターリンの進める「農業集団化」を支持し、「上からの力」を肯定した論陣を張っている。しかし、現実を直視するゴーリキーはやがてスターリンとの決裂、攻撃・非難の対象とされてゆく。やがて息子マックスの死、最後の闘いの中で謎の病死となる。

昼食をすませて、いよいよクレムリン入場。クレムリン（城壁に囲まれた町）内にあるのはもちろん教会、鐘楼だが、ここはロマノフ王朝の拠点、今は展示室となっているが「武器庫」と名づけられている部屋には女帝の正装、ダイヤをちりばめた勲章や宝刀、食器や家具類、大きな皇帝用の馬車が何台も、これはすごい。

大砲の皇帝

クレムリンの広場には権威の象徴ともいえる「鐘の皇帝」と「大砲の皇帝」が。この鐘は重さ２００ｔというから吊るせなかったのかどうか、一部割れていてその部分だけで１１ｔ。大砲は内径が９０ｃm、これも巨大すぎて「一度も発射されなかった」という。奥にあるのは大統領府でロシア国旗がはためく。プーチン大統領が執務しているところ、もちろん近づくことはできない。5時近くなって外に出る。「しばらくは自由時間、ということで解散し、公園の前の地下街に入る。若者や観光客でいっぱいのパブやブランド品の店がならぶ。生ビールは７０ルーブル、おいしかった。再び集合してレストランへ、ここでは5人の女性ヴォーカルのすばらしいコーラス。コーカサス地方の歌。たっぷり聞かせてもらっておいしいワインでモスクワ最後の食事となった。

「少し余裕がありますが早めに空港へ」ということになったがやはり夕方の渋滞。結局シェレ

メチェボ空港に着いて出国手続きを済ませたらギリギリの時間。そのまま大韓航空機に搭乗。帰りはジェット気流に乗ることもあり７時間３０分でソウル着。午前１１時。（現地時間、日本と時差なし）さっそく日本の新聞を買い求めて日本食のソバ、これもおいしかった。乗り換えて関西空港へ、４時過ぎに帰国。「また来年も」と約束して送迎タクシーで自宅まで。無事帰国となった。日本はあいかわらず暑かった。

＜アレクサンドル･ネフスキーのこと＞

去年の旅行で st.ペテルブルグのモスクワホテルに５連泊したが、ホテルの正面にあったのがアレクサンドル・ネフスキー修道院。ホテルから中心部に通じている大通りが「ネフスキー通り」。今回の旅行でロシアにおけるアレクサンドル・ネフスキーの位置を再認識させられた。

アレクサンドル・ネフスキー（1220 頃　63）1237～42 当時のロシアは南からモンゴル軍、北からスウェーデン軍とドイツ騎士団の侵入に苦しんでいた。モンゴルの間接支配は「タタールの軛（くびき）」とよばれ、250 年にわたるが、ロシア諸侯に徴税義務を課しハーンへの伺候を命じた。1240 年、スウェーデン軍を撃破したロシアのノヴゴロド公はアレクサンドル・ネフスキー（ネヴァ川のアレクサンドル）と称されるようになった。一方キプチャク汗国に対しては柔軟な政策を取ってその矛先をかわし，国の安全と大公権の強化に努めた。タタールの軛からの最終的解放は 1547 年帝位についたイワン４世（雷帝）の勝利によるが、その「親衛隊」は無法の「テロ部隊」であったといわれ雷帝と言われる所以である。

＜ロシア正教こと＞

ロシア正教の歴史は、今からおよそ一千年前まで遡ることができる。当時、ビザンチン帝国（東ローマ帝国）の首都コンスタンティノープル(現在のイスタンブール)は世界の文化的中心の一つであった。988 年にキエフを中心にロシアの国家的統一を成し遂げたウラジーミル１世(978-1015)は、コンスタンティノープルに赴いて、その地の壮麗なハギヤ・ソフィア大寺院とそこで繰り広げられる荘厳なビザンチン典礼の美しさに感動し、キエフ・ルーシの人々をギリシア正教に対する信仰心を目覚めさせた。そこでビザンチン帝国に範を求めて、「東方キリスト教(ギリシア正教)」を国教に採用した。このギリシア正教の受容によって、ロシア社会はギリシア正教の教義の導入を通じてギリシア文字(キリール文字)をはじめ、文学、美術、建築などといったあらゆる文明形式を受け入れることになった。988 年、キエフ・ルーシのウラジーミル１世はギリシア正教を国教として取り入れ、その後正教独特のねぎ坊主の教会がルーシ全土に建立され、ロシア正教のシンボルとなっていく。聖堂内に多くのイコンを掲げ、奉神礼（典礼）のときは乳香をたき、ア・カペラの聖歌で、聖職者と信者とが一緒になって荘厳に行われる。1917 年のロシア革命以降、ロシア正教はきびしい弾圧と教会の建物の破壊などの受難の歴史を経てソ連崩壊後復活を果たすが、最新の調査データではロシア正教会の信徒は人口の 75 パーセント。